学位論文要約

保健体育科教員の教育実習における指導の内容に関する基礎的研究

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻
教科教育学分野
健康スポーツ教育学領域

D176923　中川 麻衣子

目次

第 1 章　本論文の背景と研究の目的

第 1 節　本論文の背景

第 1 項　教員養成における教育実習の制度の概観

第 2 項　教育実習研究と教育実習の制度との関連

第 3 項　教育実習研究の歴史的視点からの検討

第 4 項　教育実習における教育実習指導に関する研究の概観

第 5 項　保健体育科教員養成における教育実習指導に関する研究の概観

第 2 節　問題の所在と本論文の目的

第 3 節　研究の方法と分析の枠組み及び論文の構成

第 4 節　用語の規定

第 2 章　保健体育科教員の教育実習指導における教育実習生への関わりの検討

：質問紙調査を手掛かりに

第 1 節　研究の目的

第 2 節　研究の方法

第 1 項　調査方法及び調査対象者

第 2 項　調査内容及びデータ分析

第 3 項　分析の枠組み

第 4 項　倫理的配慮

第 3 節　結果

第 1 項　保健体育科教員の教育実習指導における教育実習生への関わり

第 2 項　教職経験年数及び教育実習指導経験の相違による教育実習生への関わり

第 3 項　保健体育科教員の教育実習指導に関連する研修の受講経験と今後の受講希望

第 4 節　考察

第 1 項　教育実習指導教員の教育実習生への関わりの実態を踏まえた教育実習指導における課題の整理

第 2 項　「メンタリング育成に向けた機能関係モデル」の再検討

第 5 節　小括

第 3 章　保健体育科教員の教育実習指導における指導内容の検討
：インタビュー調査を手掛かりに
第 1 節　研究の目的
第 2 節　研究の方法
第 1 項　調査期間及び調査対象
第 2 項　調査方法及び調査内容
第 3 項　分析方法
第 4 項　倫理的配慮
第 3 節　結果
第 1 項　カテゴリー，サブカテゴリー，概念の結果
第 2 項　各概念の関連
第 4 節　考察：保健体育科教員の教育実習指導の内容と制度と連携体制の関係
第 5 節　小括

第 4 章　本論文の成果と今後の課題
第 1 節　本論文の成果
第 2 節　教育実習指導における連携体制の検討と提案
第 1 項　大学における事前事後指導の再検討
第 2 項　教育実習期間中の大学と教育実習校との連携
第 3 項　教育実習指導に関する研修の提案
第 3 節　今後の研究課題と研究の限界
第 1 項　今後の研究課題
第 2 項　研究の限界と今後の展望

引用文献
資料
謝辞

1. 本論文の背景

教育実習は，日本の教員養成の中でも，極めて重要な教育的機能を担っている科目である（有吉，2009；藤枝，2001；米沢，2008a）．教育実習の制度を教育職員養成審議会答申と中央教育審議会答申を軸に検討すると，以下の2点に整理することができる（表1）．まず，教育実習研究と教育実習の制度との関連を検討すると，制度として実施されている答申の内容が，教育実習研究のキーワードとして設定されている．次に，中央教育審議会（2006）以降，教育実習研究の数は増加傾向にあった．しかし，藤枝（2001）の指摘にもあるように，教員養成を担う大学が各大学の実践を検証することを目的とした報告が中心となっている．したがって，日本の教員養成教育を見据えた報告や，制度への期待について論考する報告は限定的あることがわかる．

さて，教育実習では，教育実習を受け入れる学校に勤務する教員が教育実習指導教員として教育実習生の指導を担当する．教育実習生の成長を保証する上でも，教育実習において教育実習指導教員の役割は重要である（深見・木原，2004；米沢，2010b）．日本の教育実習指導に関する議論の中では，2000 年頃から，欧米諸国における教育実習の制度や教育実習で導入されているメンタリングが紹介されている（磯﨑ほか，2002；木原，2000）．これらの報告から，日本の教育実習指導においても，教育実習指導教員をメンター，教育実習生をメンティと解釈されてきた．そして，日本の教育実習におけるメンタリングの先行研究では，指導教員からメンタリングが不十分であれば，教育実習においてリアリティショックを経験した場合，教職への興味が低下することが報告されている（児玉，2016）．加えて，教育実習において教員によるメンタリングや他の教育実習生との協働が重要であるというメンタリングの成果についても報告されている（越智・磯﨑，2016）．

一方，中央教育審議会（2006）では，教育実習における教育実習指導は，複数の教員が協力して指導を行うことや，教育実習指導教員が校務分掌上，明確に位置付けられ，責任を持って教育実習生を指導する校内体制の構築の必要性などが示されている．これは，日本の教育実習における教育実習指導の課題への指摘であろう．しかし，三島ほか（2021）は，教育実習における教育実習指導教員に焦点を当てた研究は少なく，教育実習指導教員が教育実習指導をどのように経験しているのかという点については十分に明らかにされていないと指摘している．つまり，日本の教育実習研究において，教育実習校における教育実習指導の内実に着目した研究が少なく，これにより，教育実習における教育実習指導教員の役割が明確となっていない現状がある．

さらに，教育実習の検討において，教科の視点も重要である．日本の中学校・高等学校は教科担任制として，学校教育を行っており，それらの養成の実態も教科によって異なることが予想される．保健体育科教員は，運動部活動や地域スポーツの現場に関わる機会が多い傾向にあり（滝沢ほか，2018），教科としての期待は学校現場に留まらない．そのような背景から，保健体育科教員養成においても，教育実習は重要な科目であると位置づけられ，各大学の教育実習の実態が蓄積されている（徐ほか，2018；松田，2020；内田，2015）．しかしながら，保健体育科教員養成における教育

表 1　教育実習に関する先行研究の変遷における件数とその割合

年代 （年）	件数 （件）	割合 （%）	キーワード	主な教育実習に関連する答申等
1950-1954	4	0.15	教職観，教職希望	
1955-1959	12	0.46	教育実習，研究実習 オリエンテーション	
1960-1964	7	0.27	教育実習報告	
1965-1969	9	0.35	他国との比較， 振り返り， 教育実習生のストレス，教職観	
1970-1974	23	0.88	成果，指導技術， 教科教育， フィードバック	
1975-1979	86	3.30	教育実習の問題点や改善点， マイクロティーチング	**◇1978 年「教員の資質能力の向上について（答申）」：中央教育審議会**
1980-1984	114	4.38	現状，問題点， プログラム化， マイクロティーチング	
1985-1989	119	4.57	事前指導， 教授スキル	**◇1987 年「教員の資質能力の向上方策等について（答申）」：教育職員養成審議会**
1990-1994	172	6.61	事前事後指導，開発	
1995-1999	201	7.72	（学生の）不安， ストレス， 自己評価	**◇1997 年「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第 1 次答申）」：教育職員養成審議会** **◇1999 年「養成と採用・研修との連携の円滑化について（第 3 次答申）」：教育職員養成審議**
2000-2004	275	10.56	実践的指導力， 事前事後指導， （学生の）変化	
2005-2009	491	18.86	プログラム， カリキュラム， 反省的実践， リフレクション	**◆2006 年「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」：中央教育審議会**
2010-2014	598	22.97	教育実習生の成長， メンタルヘルス， 連携	**◇2012 年「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策（答申）」：中央教育審議会**
2015-2018	492	18.90	ICT， ボランティア， 学校インターンシップ	**◇2015 年「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」：中央教育審議会** **◇2017 年「教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令」**
合計	2603	100		

実習指導の内実に踏み込んだ報告はみられない．そして，保健体育科教員養成における教育実習指導に着目した研究として，岩田ほか（2006）の研究が挙げられる．岩田ほか（2006）は，保健体育科教員養成における教育実習指導に着目した研究として，教育実習指導教員の指導内容に着目し，

教師の信念，授業計画，授業前の準備，教材研究に関する内容が，保健体育科教育実習での指導の実態であると報告している．また，久保ほか（2008）は，体育授業を実践する大学院生に着目し，教員によるメンタリングの成果について報告している．さらに，藤田（2015）は，米国の体育系の教員養成における教育実習の事例から，教育実習生・教育実習指導教員・大学教員の三者の連携が重視されていることと，教育実習指導に関する幅広い研究成果が具体的な手続きを踏まえて報告されていることを紹介している．

以上，保健体育科教員養成の教育実習に関する先行研究から，教育実習における指導の内容に関する多様な視点から研究成果の蓄積への期待が窺える．しかし，保健体育科教員養成における教育実習指導の実態を定量的に分析した研究は皆無に等しく，また，定性的な研究も少ない．したがって，教育実習指導の充実・発展の観点から，保健体育科教員による教育実習指導において，教育実習生に対してどのように関わり，どのような指導内容を展開しているかというような実態と課題を整理することは，保健体育科教員養成における教育実習生の力量形成や質保証の観点からも焦眉の課題である．さらに，教育実習の検討を行うために，教育実習指導教員に着目し，教育実習における指導の内容に踏み込んだ検討を行うことにより，教育実習指導の実態と課題を整理できるとともに，教育実習の連携体制の提案に論及できることが推察される．

2. 研究の目的

本論文の目的は，保健体育科教員の教育実習指導の内容を明らかにし，教育実習指導の実態と課題を整理することである．また，保健体育科教員による教育実習指導の実態や課題を基に，教育実習における連携体制の検討と提案を行うことを目指す．具体的な研究課題として，以下の 3 点を設定した．

研究課題（1）保健体育科教員による教育実習指導に焦点化し，教育実習指導における教育実習生への関わりの実態を明らかにする．

研究課題（2）保健体育科教員による教育実習指導に焦点化し，教育実習の指導内容を明らかにするとともに，教育実習の指導内容に影響する制度と連携体制の関連性を明らかにする．

研究課題（3）研究課題（1）及び研究課題（2）で得られた保健体育科教員による教育実習指導の内容の実態と課題から，教育実習における連携体制の検討と提案を行う．

3. 本論文の研究方法と論文構成

第 1 章では，日本の教育実習に関連する研究を対象とし，教育実習研究と制度の検討，「過去-現在-未来」の歴史的な観点から文献研究を行った．さらに，日本の教育実習研究において今後着手すべき研究課題の把握の精緻化を図った．これにより，教育実習指導に着目した研究が蓄積されて

いないことから，第 2 章及び第 3 章では，保健体育科教員の教育実習における指導の内容を明らかにすることを試みた．

第 2 章では，保健体育科教員の教育実習指導における教育実習生への関わりに着目した．研究方法は，中学校・高等学校の保健体育科教員を対象とした質問紙調査を行った．質問項目は，小柳（2011）が提案する教育実習指導における教育実習指導教員の「関わり方の 7 つのポイント」及び 55 の具体的な設問を質問項目として援用した．次に，第 3 章では，保健体育科教員の教育実習における指導内容に焦点化した．研究方法は，保健体育科教員を対象とした教育実習指導に関するインタビュー調査により，保健体育科教員による教育実習における指導内容を質的に明らかにした．質問内容は，米沢（2008b）の教育実習指導に関する質問項目を参考に作成した．分析の方法は，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach：以下，M-GTA とする）（木下，2007）を用いた．

第 4 章では，各章で明らかになった保健体育科教員の教育実習における指導の内容の実態を整理し，課題を抽出した．そして，抽出された教育実習おける指導の内容に関する課題を踏まえて，教育実習における連携体制の検討と提案を行った．最後に，本論文の結論を踏まえて，研究の限界と今後の課題を示した．本論文の構成は図 1 に示す通りである．

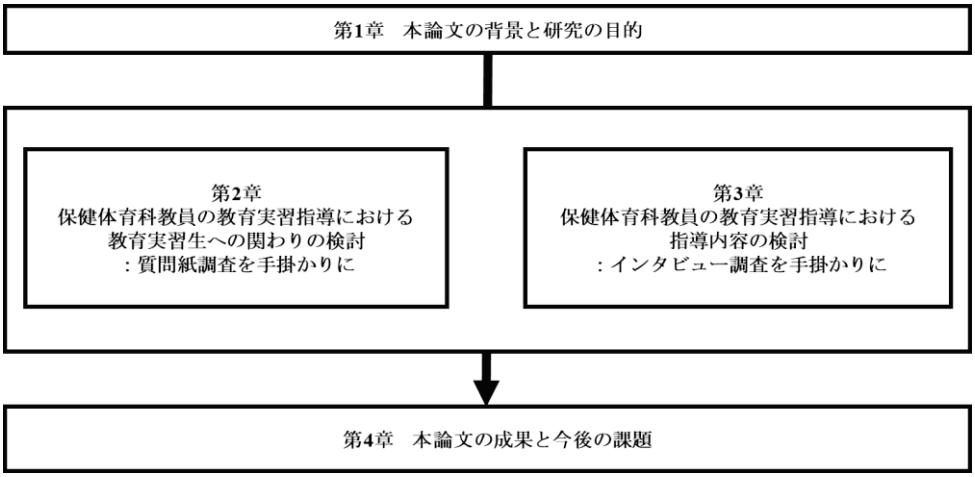

図 1　本論文の構成

本論文では，マクロレベル・メゾレベル・ミクロレベルの分析の枠組みを設定した．Marco and Irena（2009）は，教師教育研究において，マクロレベル・メゾレベル・ミクロレベルでの分析の枠組みを適用している．また，大森ほか（2017）は，大学教育の質保証に関する研究において，マクロレベルを政府，メゾレベルを大学，ミクロレベルを学生と設定している．このように，マクロレベル・メゾレベル・ミクロレベルは，教育学や教師教育学の分野で，活用することができる分析の枠組みであるといれる．そこで，本論文はこれらに関連する分野の研究であることから，マクロレ

ベル・メゾレベル・ミクロレベルの分析の枠組みを援用する．そのことにより，本論文で得られた教育実習指導の実態と課題に対して，それぞれのレベルとの連携を検討する視点から，今後，改善すべき方向性を提案する．具体的には，マクロレベルを，文部科学省・教育委員会といった政府や行政のレベル，メゾレベルを，大学といった教員養成レベル，ミクロレベルを教育実習校といった学校レベルと設定した．本論文の分析の枠組みを図 2 のように示した．

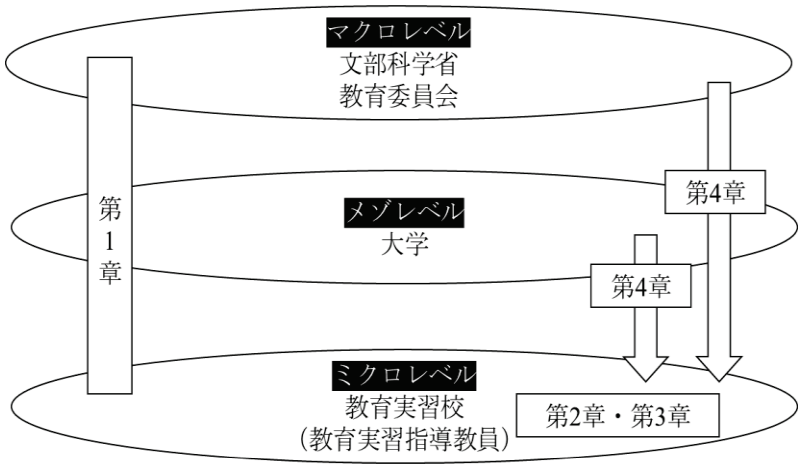

図 2　本論文の分析の枠組み

4. 結果

4.1. 保健体育科教員の教育実習指導における教育実習生への関わりの検討：質問紙調査を手がかりに

本節では，保健体育科教員養成における教育実習指導教員の実態と課題について，メンタリングの視点から定量的に整理することによって明らかにすることを目的とした．そのため，調査方法は，無記名自記式質問紙調査を行った．調査時期は，2020（令和 2）年 12 月 1 日から 12 月 31 日とした．質問紙の回収数は，327 名（25.3%），有効回答数 287 名（87.8%）であった．

対象とした保健体育科教員の教育実習生への関わりについての質問項目及び対象者全体の回答の傾向を示すために，回答数と全体に占める割合（%）を表 2 示した．まず，「十分行っている（十分行いたい）」，または「行っている（行いたい）」という回答の合計の割合は「A. リレーディング」80.7%，「B. アセッシング」64.2%，「C. ファシリテーティング」83.9%，「D. ティーチング」79.7%，「E. コーチング」64.1%，「F. カウンセリング」68.8%，「G. コンサルティング」63.1%であった．また，表 3 は，対象者の教育実習指導経験の有無と A から G の平均値をまとめたものである．

表 2　保健体育科教員の教育実習指導における教育実習生への関わり

n=287

質問項目		十分行った		行った		時々行った		行っていない	
		n	%	n	%	n	%	n	%
Aリレーディング	1.　実習生が話しやすい雰囲気作り・環境づくりを行う	142	49.5%	129	44.9%	15	5.2%	1	0.3%
	2.　実習生の話のペースにあわせ、目線を合わせる工夫をする	97	33.8%	148	51.6%	36	12.5%	6	2.1%
	3.　実習生と教育でお互いの目指すもの、大切にしているものを語り合う	77	26.8%	129	44.9%	72	25.1%	9	3.1%
	4.　実習生が他の教員と話す機会を作るように働きかけ調整する	76	26.5%	129	44.9%	78	27.2%	4	1.4%
Bアセッシング	5.　実習生が何に関心を持っているか、性格などを知るための情報を集める	37	12.9%	120	41.8%	102	35.5%	28	9.8%
	6.　実習生の勤務態度についての情報を集める	45	15.7%	109	38.0%	90	31.4%	43	15.0%
	7.　実習生が教材研究の仕方を知っているか、授業の準備の様子の情報を集める	95	33.1%	124	43.2%	57	19.9%	11	3.8%
	8.　実習生と児童・生徒との関わりについての情報を集める	109	38.0%	128	44.6%	42	14.6%	8	2.8%
	9.　実習生の授業実践の様子の情報を集める	142	49.5%	120	41.8%	22	7.7%	3	1.0%
	10.実習生が授業を分析する力があるかどうかの情報を集める	48	16.7%	137	47.7%	81	28.2%	21	7.3%
	11.実習生について子どもからの評価情報を集める	34	11.8%	83	28.9%	107	37.3%	63	22.0%
	12.実習生の話し方・自己表現に関する情報を集める	80	27.9%	131	45.6%	62	21.6%	14	4.9%
	13.実習生が自分自身をどのように思っているか、自己研鑽している様子などについての情報を集める	43	15.0%	109	38.0%	92	32.1%	43	15.0%
	14.他の同僚からの実習生の評価情報を集める	43	15.0%	105	36.6%	91	31.7%	48	16.7%
Cファシリテーティング	15.実習生の姿を見かけると声かけをする	140	48.8%	115	40.1%	29	10.1%	3	1.0%
	16.実習生のいいところを見つけてほめる	144	50.2%	118	41.1%	23	8.0%	2	0.7%
	17.実習生の課題を見つけて、次につなげる言葉かけをする（子どもの例をあげてなど）	148	51.6%	111	38.7%	27	9.4%	1	0.3%
	18.実習生の「やってみる」「やってみたい」という雰囲気を作る努力をする	102	35.5%	140	48.8%	40	13.9%	5	1.7%
	19.実習生が教師としての自分を感じられる場を作るようにする	113	39.4%	136	47.4%	31	10.8%	7	2.4%
	20.実習生が自分失敗例なども紹介し、やる気を促す努力をする	107	37.3%	130	45.3%	39	13.6%	11	3.8%
	21.実習生が近い年齢や関心が近い人と話し合える機会を作る	54	18.8%	112	39.0%	96	33.4%	25	8.7%
	22.実習生にとって参考になると思われる情報の提供を行う	105	36.6%	151	52.6%	29	10.1%	2	0.7%
Dティーチング	23.実習生に学校の設備や利用できるものを説明する	128	44.6%	124	43.2%	33	11.5%	2	0.7%
	24.実習生に教師の仕事・学校の仕事などについて語る	131	45.6%	114	39.7%	39	13.6%	3	1.0%
	25.実習生に児童生徒との接し方について語る	144	50.2%	112	39.0%	29	10.1%	2	0.7%
	26.実習生に児童・生徒理解の仕方（見取り方）を語る	124	43.2%	123	42.9%	39	13.6%	1	0.3%
	27.実習生に指導案の書き方、授業の準備・仕方を語る	130	45.3%	123	42.9%	28	9.8%	6	2.1%
	28.実習生に授業を見せてその取組の意図を語る	148	51.6%	117	40.8%	20	7.0%	2	0.7%
	29.実習生に教材研究の大切さやそれを磨いていく方法を語る	118	41.1%	119	41.5%	44	15.3%	6	2.1%
	30.実習生に学年での取組や他の同僚とどのように関わっていくかを語る	56	19.5%	130	45.3%	85	29.6%	16	5.6%
	31.　実習生に授業研究、授業記録などに基づいて、振り返りや自分ならどうするか、話し合う機会を作る	127	44.3%	117	40.8%	39	13.6%	4	1.4%
	32.　実習生に保護者との関わり方などを語る	21	7.3%	82	28.6%	121	42.2%	63	22.0%
Eコーチング	33.　実習生に受け入れているメッセージを伝える工夫をする（本人の強みに意識が向くように、それを心から伝える）	25	8.7%	146	50.9%	97	33.8%	19	6.6%
	34.　実習生に、評価ではなく、私が感じたことと断って相手に自分の思いや考えを伝える（感じたことをIメッセージで伝える）	62	21.6%	144	50.2%	66	23.0%	15	5.2%
	35.　実習生に「今日の授業で、何を感じたか？」「今、何が見えたか？」「今、何が聞こえたか？」など、心に感じていることを引きだす問いかけをする	67	23.3%	108	37.6%	86	30.0%	26	9.1%
	36.　実習生にYES, NOで応えてもらう問いでなく、思いや考えを自由に述べてもらう問いかけをする（相手の専門性や強さに働きかけることを意識して）	82	28.6%	140	48.8%	56	19.5%	9	3.1%
	37.　実習生の視野を広げる問いを工夫する（「本当はどうしたかったのか？」可能性を引き出す問いの工夫）	76	26.5%	127	44.3%	78	27.2%	6	2.1%
	38.　実習生に「どうしたら成功した（する）と思う？」「どうすればできた（できる）と思う」という明日や今後につながる問いの工夫をする	78	27.2%	150	52.3%	51	17.8%	8	2.8%
	39.　実習生に「〇〇ってどういうことですか？」「〇〇するとどうなりそうですか？」「今、話してみていかがですか？」というより詳細に語ってもらう問いかけの工夫をする	37	12.9%	113	39.4%	111	38.7%	26	9.1%
	40.　実習生に見方の枠組みや方向を変える問いかけの工夫をする（ポジティブな解決思考へ向けて）（視点を変える問いかけ）	56	19.5%	130	45.3%	88	30.7%	13	4.5%
	41.実習生に「他の人が行うときはどうしたらいいか？」など、いったん本人の立場から切り離させる問いかけの工夫をする	22	7.7%	93	32.4%	123	42.9%	49	17.1%
	42.実習生から質問をされた後、すぐに切り返す「私はこう思うが、あなたならどうする？」努力や工夫をする	54	18.8%	131	45.6%	86	30.0%	16	5.6%
Fカウンセリング	43.実習生にこちらから話しかけ、声を聞く姿勢と時間を設けるように工夫をする	98	34.1%	136	47.4%	49	17.1%	4	1.4%
	44.実習生に声かけをし、声を引き出す（うなずき、繰り返し、言い換え等を使って）	94	32.8%	143	49.8%	45	15.7%	5	1.7%
	45.実習生の反応を見て語りかける言葉に気をつける	100	34.8%	139	48.4%	42	14.6%	6	2.1%
	46.実習生の話を聞き、自分の失敗例等の話、相手の状況に共感する工夫をする	99	34.5%	144	50.2%	40	13.9%	4	1.4%
	47.実習生とピア（相互に）カウンセリングを行う	21	7.3%	68	23.7%	111	38.7%	87	30.3%
	48.実習生に関わって同僚や管理職に相談し対応を考える	32	11.1%	94	32.8%	106	36.9%	55	19.2%
	49.実習生の経過観察を行い、言葉かけを行い、話す時間を作る	65	22.6%	149	51.9%	64	22.3%	9	3.1%
Gコンサルティング	50.実習生の関心や要望を聞く努力をし、それに関わる情報を提供する	58	20.2%	140	48.8%	76	26.5%	13	4.5%
	51.実習生の関心や要望を聞く努力をし、それに関わる所在情報を提供する	44	15.3%	110	38.3%	102	35.5%	31	10.8%
	52.実習生の関心や要望を聞く努力をし、それに関わり詳しい人を紹介する	39	13.6%	80	27.9%	105	36.6%	63	22.0%
	53.実習生の課題解決や問題解決に向けて、その手続きについてアドバイスをする	67	23.3%	144	50.2%	61	21.3%	15	5.2%
	54.実習生の課題解決や問題解決に向けて、その取組状況・結果について一緒に考える	83	28.9%	136	47.4%	61	21.3%	7	2.4%
	55.実習生の課題解決や問題解決に向けて、その取組状況・結果について報告させる	57	19.9%	128	44.6%	79	27.5%	23	8.0%

本論文では，教育実習指導経験をAからGの平均値に対して指導経験有無の比較を*t*検定で行った．その結果，教育実習指導の経験者と，教育実習指導の非経験者については，「D．ティーチング」の平均値に有意差が認められた（$p<0.05$）．教育実習指導経験がある者の「D．ティーチング」の平均値は2.96であり，教育実習指導経験のない者の平均値は2.82であった．

表3　教育実習経験の有無と各機能の平均値

指導経験	経験なし　n=46		経験あり　n=241	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
A．リレーディング	3.18	0.515	3.12	0.509
B．アセッシング	2.75	0.640	2.79	0.554
C．ファシリテーティング	3.15	0.543	3.22	0.488
D．ティーチング　＊	2.86	0.654	3.21	0.463
E．コーチング	2.60	0.713	2.80	0.592
F．カウンセリング	2.75	0.699	2.88	0.555
G．コンサルティング	2.64	0.757	2.76	0.687
全体の平均	2.82	0.55198	2.96	0.445

＊$p<0.05$

本調査の結果を以下の3点に整理した．

（1）保健体育科教員は，教育実習指導経験を通して，「ティーチング」を教育実習指導教員の役割として認識することが明らかとなった．

（2）保健体育科教員は，「リレーディング」・「ファシリテーティング」・「ティーチング」の3点について，教育実習指導教員の役割として認識している傾向にあった．

（3）保健体育科教員の中でも，「アセッシング」・「コーチング」・「カウンセリング」・「コンサルティング」に関しては，教育実習指導教員の役割としての認識に相違が見られた．

4.2. 保健体育科教員の教育実習指導における指導内容の検討：インタビュー調査を手掛かりに

本節では，保健体育科教員による教育実習の指導内容と教育実習の制度と連携体制の関係を明らかにするために，研究方法としてインタビュー調査法を適用した．調査期間は2020年12月から2021年6月であった．調査対象は，教育実習指導経験のある中学校・高等学校教員T1，T2，T3，T4，T5，T6，T7，T8の8名であり，教職歴は5年から18年であった．

M-GTAによる分析の結果，26個の概念が生成された．また，9個のサブカテゴリー，3個のカテゴリーに集約された．生成された概念とサブカテゴリー及びカテゴリーと対象者の各概念に該当する発言の有無を表4に示す．さらにカテゴリー間及びサブカテゴリー間の関係性を分析した結果を図3に示した．図3は，本節で明らかとなったカテゴリー，サブカテゴリーの「関連」の矢印，と課題としての残った関連を「期待される関連」の矢印を示している．なお，文中の＜ ＞は概念，［ ］はサブカテゴリー，カテゴリーは【 】で示した．

表 4　保健体育科教員の教育実習指導に関するカテゴリー・サブカテゴリー・概念

	カテゴリー	サブカテゴリー	概念	対象者								該当対象者数
				T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8	
1	教育実習指導の指導方略と経験	教職の経験	学生時代の教育実習経験		●	●	●		●		●	5
2			これまでの教職経験	●		●					●	3
3		教育実習生への指導内容	授業実習に関する事前指導				●			●		2
4			授業実習に関する指導内容		●		●	●	●	●	●	6
5			教育実習生への関わり			●		●	●			3
6			学級経営における指導内容							●		1
7			運動部活動に関する指導内容			●			●		●	3
8			その他の指導内容					●	●		●	3
9		教育実習生の個に応じた指導	教育実習生の進路	●	●	●	●	●		●	●	7
10			教育実習生の意欲・積極性			●	●	●	●	●	●	6
11	教育実習生の理解	教育実習生への期待	教育実習生による生徒との関わり	●		●	●					3
12			教育実習生の教師としてのふるまい	●		●				●		3
13			教育実習生の事前準備		●		●	●		●	●	5
14		教育実習指導への関心	教育実習指導において重視していること	●		●		●			●	4
15			教育実習指導による学びと自身の変化・成長	●	●	●		●				4
16	教育実習の制度と連携体制	教育実習校の指導体制	指導教員によって異なる授業実習の内容	●	●	●						3
17			校内での教員間の事前打ち合わせ	●			●	●	●	●	●	6
18			教育実習担当教員の選出方法	●	●		●	●				4
19			校内の教員との連携			●		●		●	●	4
20			教育実習校によって異なる授業実習		●		●		●			3
21		教育実習の特質と成果	教育実習における成果の保障	●					●			2
22			母校実習の特徴	●	●	●	●	●				5
23			教育実習指導と通常の業務のバランス	●	●		●					3
24		大学との連携	教育実習日誌の形式				●				●	2
25			大学との連携の内容	●		●	●	●		●	●	6
26		研修の必要性	教育実習指導に関する研修の必要性			●	●		●	●	●	5
			概念数	13	10	15	15	13	10	11	14	

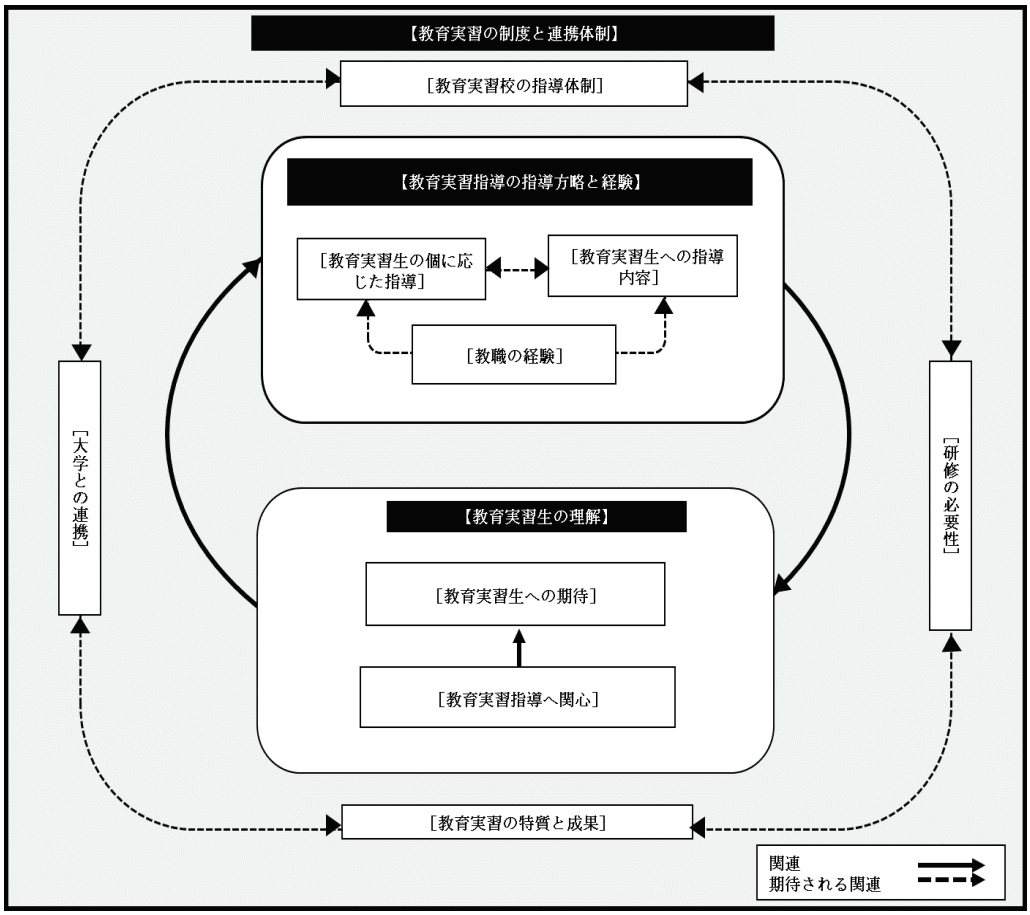

図 3　保健体育科教員の教育実習における指導の内容と
教育実習における制度と連携体制の関係

本調査の結果を以下 3 点に整理した.

(1) 中学校・高等学校保健体育科教員は，教育実習指導教員として，学生時代の教育実習経験やこれまでの教職の経験を踏まえた教育実習指導を行っていた．一方で，教育実習校内での連携や大学との連携体制に課題が残った.

(2) 教育実習指導は，教育実習指導教員に一任されており，中学校・高等学校保健体育科教員は，教育実習指導教員や教育実習校によって異なる教育実習の指導内容に課題があると認識していることが明らかとなった.

(3) 教育実習の制度及び教育実習指導の連携体制は，教育実習指導教員による教育実習の指導内容に影響していることが明らかとなった．一方，教育実習指導教員には，現在の教育実習の制度及び教育実習指導の連携体制の改善へ期待はないことが明らかとなった.

5. 本論文の成果と今後の研究課題

5.1. 本論文の成果

本論文の目的は，保健体育科教員の教育実習指導の内容を明らかにし，教育実習指導の実態と課

題を整理することであった．そこで，3 点の研究課題を設定し，保健体育科教員を対象とした量的かつ質的な調査によって抽出された課題を捉え直し，以下の 3 点に成果を再整理した（表 5）．

表 5　保健体育科教員による教育実習指導の検討によって抽出された課題と提案

抽出された課題	第 2 章	第 3 章	提案
大学での教育実習に関する指導（事前事後指導）	○	○	大学における教育実習の事前事後指導の再検討
大学と教育実習校との連携（教育実習期間中）		○	教育実習期間中の大学と教育実習校との連携
教員の教育実習指導に関する学習経験	○	○	教育実習指導に関する研修の提案

第 1 に，大学における教育実習に関する指導の課題である．第 1 章の教育実習研究の検討により，戦後から継続して教育実習研究として報告がみられたキーワードの一つが教育実習の事前事後指導であった．さらに，第 2 章では，保健体育科教員の教育実習指導における教育実習生への関わりの認識は，教職経験年数，教育実習指導の経験の有無によって異なる関わりがあることが明らかとなった．また，第 3 章では，教育実習指導において，大学との連携に課題があることが明らかとなり，さらに連携に期待をしない教員もいることが明らかとなった．これらの結果から，教育実習は，大学の教育実習に関する指導の充実によって，教育実習生のさらなる成長につながることが期待される．このことから，大学における教育実習の指導，具体的には，事前事後指導の再検討が課題であることが明らかとなった．

第 2 に，教育実習期間中の大学と教育実習校の連携に関する課題である．教育実習研究の整理からも，大学と教育実習校の連携が必要であることが明らかとなっている．加えて，第 3 章において，大学と教育実習校の連携は十分ではないことが明らかになった．さらには，教育実習指導教員が，教育実習指導において困難を抱えていることが窺えた．また，教育実習指導において，同僚教員との連携や同僚教員からの支援があるもの，組織的な連携体制に関する事例はなく，教育実習指導は教育実習指導教員に一任されている実態も明らかとなった．中央教育審議会（2006）では，大学と教育実習校の連携の必要性について言及されている．このことから，大学と教育実習校との連携に関する方策の検討についての課題が明らかとなった．

第 3 に，教育実習指導教員に教育実習指導に関する学習経験がないという課題である．第 2 章において，保健体育科教員は，教職経験年数や教育実習指導の経験によって教育実習指導の内容の相違が明らかとなった．つまり，教育実習指導教員によって教育実習生への関わりは異なることが明らかとなった．さらに，第 3 章により，保健体育科教員は，学生時代の教育実習経験と，これまでの教職経験といった，自身の経験が教育実習指導のよりどころとなっていることに対して不安に感じていることが示唆された．これは，大学の教員養成や現職教育において，教育実習指導に関する

学習が義務付けられていないことが背景にあると推察される．このことから，保健体育科教員は教育実習指導に関する学習機会がないという課題が明らかとなった．

本論文では，マクロレベル・メゾレベル・ミクロレベルの 3 つのレベルによる分析の枠組みによって，保健体育科教員の教育実習における指導の内容から抽出された実態と課題を踏まえて，再構築が期待される 3 つの視点を述べる．

(1) 文部科学省による大学及び教育実習校への制度の再構築

(2) 教育委員会から大学及び教育実習校への連携体制の再構築

(3) 大学から教育実習校への連携体制の再構築

さらに，上記 3 点の再構築が実施されるためにも，教育実習の実態を絶えず共有することが不可欠である．そこで，以下の 3 点について情報の共有化を実施していくことを期待する．

(1) 教育実習校からみた大学への教育実習指導の内容の共有

(2) 教育実習校から文部科学省・教育委員会への教育実習指導の内容の共有

(3) 大学から文部科学省・教育委員会への教育実習指導の内容の共有

これらの取り組みによって，さらに詳細な教育実習指導の内容を明らかにすることができると考えられる．そして，これらの情報の共有を基に，教育実習を取り巻く制度・連携体制の再構築の改善につながるであろう（図 4）．

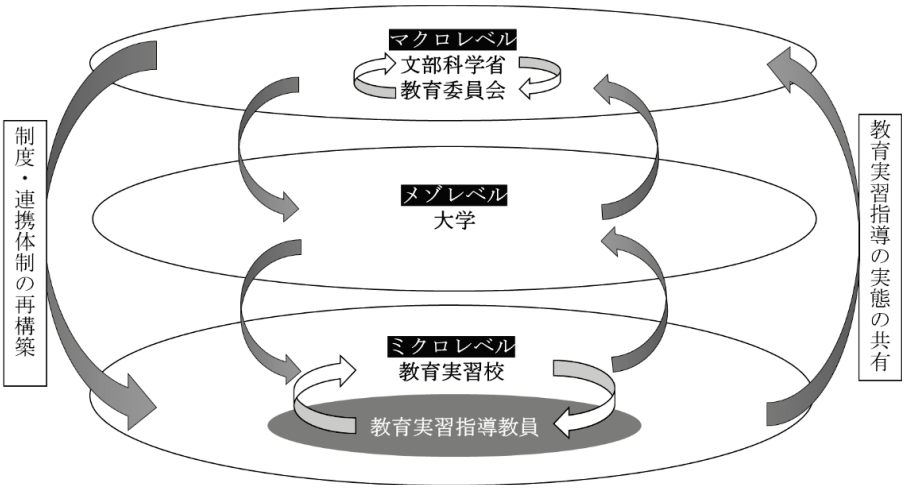

図 4　教育実習指導を取り巻く制度と連携体制の再構築の提案

5.2. 研究の限界と今後の課題

最後に，これらの課題を踏まえて，研究の限界と今後の展望は以下の通りである．

まず，本論文の対象者は，中学校・高等学校保健体育科教員に限定して調査を行ったため，教科が限定的であり，さらに，保健体育科と他教科との比較には至らなかった．今後は，教科や校種の枠を超えた調査が求められることが推察される．

また，学校教育を取り巻く環境は絶えず変化していくことから，本論文を発表した時点で，新しい教育が始まっている．さらに，大学が担う教員養成は，未来の子どもたちを育てることと繋がっ

ている．そのため，継続した調査研究，つまり，縦断的なアプローチによる検討に取り組みつつ，時代に応じた教員養成の検討とも連携を図る研究にも着手する必要がある．

加えて，本論文は，日本の教育実習指導に限定していたため，諸外国の教育実習指導との比較検討までには至らなかった．今後は，国際的な視点から，日本と異なる教育実習の制度及び教育実習指導の実態調査を行うことにより，日本の教育実習の特質と成果がより一層明らかにすることができる．そして，これらの成果の蓄積は，教育実習を経験する教育実習生のみならず，教育実習指導教員の成長と学校教育の充実に貢献することが期待される．

引用文献

阿部雄太・大島崇行（2021）教育実習指導における指導教員の変容に関する事例的研究．上越教育大学研究紀要．41（1）：21-34.

有吉英樹（2009）実践的指導力の育成を目指す教員養成教育の在り方：岡山大学教育学部の場合．岡山大学附属教育実践総合センター紀要，9：73-82.

別惣淳二（1995）教育実習生の知識構造から捉えた反省的思考に関する研究：コンセプト・マップ法の活用を通して．広島大学教育学部紀要第 1 部，44：193-202.

別惣淳二・長澤憲保（1999）教師教育の実践報告 社会教育施設と連携した事前指導・観察参加実習の成果：教員養成の個性化を志向した教育実習カリキュラムの開発．日本教師教育学会年報，（8）：119-130.

中央教育審議会（1978）教員の資質能力の向上について（答申）．文部省.

中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）．文部科学省.

中央教育審議会（2011）今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）．文部科学省.

中央教育審議会（2012）教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）．文部科学省.

中央教育審議会（2015）これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）．文部科学省.

Clarke，A.，Triggs，V．and Nielsen，W.（2014）Cooperating teacher participation in teacher education：A review of the literature．Review of Educational Research，84（2）：163-202.

Cochran-Smith，M. and Villegas，A．M.（2015）Studying teacher preparation：The questions that drive research．European Educational Research Journal，14（5）：379-394.

Cohen，S．E.，Hoz，R.，and Kaplan，H.（2013）The practicum in preservice teacher education：A

review of empirical studies. Teaching Education, 24（4）: 345-380.

Creswell, J.W.（2009）Research design : Qualitative, quantitative, and mixedmethods approaches, 3rd ed. Sage Publications, Inc.

江藤智佐子（2018）教職課程における学校インターンシップに関する研究：アーリー・エクスポージャーとしての機能に着目して．久留米大学文学部紀要，情報社会学科編，（13）: 17-30.

藤枝静正（2001）教育実習学の基礎理論研究．風間書房：東京.

藤田育郎（2015）大学における模擬授業の手法とその成果．岡出美則，友添秀則，松田恵示，近藤智靖編，新版体育科教育学の現在．創文企画：東京，pp.210-223.

藤原昌太・佐久間浩美・池谷壽夫・江黒友美・菅沼徳夫（2019）学校インターンシップにおける課題の検討：実習校における管理職の意識調査より．了徳寺大学研究紀要，（13）: 7-14.

深見俊崇・木原俊行（2004）他者との関わりによる教育実習生の実践イメージの変容．日本教育工学会論文誌，28（1）: 69-78.

後藤壮史（2016）学校現場における同僚性の構成概念についての検討：教員間の関係性に着目して．奈良教育大学教職大学院研究紀要 学校教育実践研究，（8）: 19-28.

羽野ゆつ子・堀江伸（2002）教員養成系学生における授業実習経験による「教材」メタファの変容．教育心理学研究，50（4）: 393-402.

橋本三嗣・青谷章弘・井上芳文・岡留優介・喜田英昭・河野芳文・砂原徹・富永和宏・森脇政泰・今岡光範・小山正孝・下村哲（2009）教育実習の評価のあり方の改善について（3）数学科における到達目標を明確にした評価の改善．学部・附属学校共同研究紀要，38 : 55-60.

長谷川順一・山岸知幸・川地由美・山内秀則・三好一生・吉井雅英・山下さゆり（2012）小学校及び中学校主免教育実習生の教育実習に対する態度傾向．香川大学教育実践総合研究，25 : 137-146.

Hastings, W. （2004）Emotions and the practicum : The cooperating teachers' perspective. Teachers and Teaching, 10（2） : 135-148.

日景弥生・青木香保里・志村結美（2017）教育実習における教師としての資質能力の変容．日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集，6（0）: 81.

姫野完治（2003）教育実習の実態に関する基礎的研究：教職志望学生への質問紙調査を通して．秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，（25）: 89-99.

姫野完治・渡部淑子（2006）省察を基盤とした教育実習事後指導プログラムの開発．秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，（28）: 165-176.

姫野完治（2010）段階的教育実習による教職志望学生の成長観の変容．秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，32 : 153-165.

久村恵子（1997）メンタリングの概念と効果に関する考察：文献レビューを通じて．経営行動科学，

11（2）：81-100.

星野昭彦（1974）教育実習生による授業の指導技術の分析 I．千葉大学教育学部研究紀要，23：123-133.

星野桂一（2013）一人一人が経営参画意識を高める学校のあり方：教員の関わり合いを深める校内研究の改善，山形大学大学院教育実践研究科年報，（4）：280-283.

Hudson，P．and Millwater，J．（2008）Mentors’views about developing effective English teaching practices．Australian Journal of Teacher Education，33（5）：1-13.

磯﨑哲夫・磯﨑尚子・木原成一郎（2002）教育実習に対する国立大学附属学校指導教官と教育実習生の意識調査：教育実習におけるメンタリングの可能性を探る．日本教科教育学会誌，25（2）：21-30.

磯﨑尚子・西谷真美（2014）実習における教育実習生の意識変容と成長に関する研究．富山大学人間発達科学部紀要，9（1）：51-59.

伊藤文一・柴田悦子（2014）メンターを活用した若手教員の OJT についての一考察：中学校における組織文化に着目して．福岡女学院大学紀要 人文学部編，（24）：123-150.

岩瀬直樹（2016）教員のファシリテーション力を高める校内研修の進め方（特集チームづくりにも，AL にも！校内研修で，「ファシリテーション力」を育てよう）．教職研修，44（12）：22-27.

岩田昌太郎・松岡重信・木原成一郎（2006）教育実習における指導内容に関する事例研究：実習日誌とインタビューを手がかりに．体育科教育学研究，22（2）：1-10.

岩田昌太郎・嘉数健悟（2008）教育実習における評価規準の項目に関する研究．広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域，（57）：293-300.

岩田康之・大和真希子・山口晶子・早坂めぐみ（2016）「開放制」原則下の実践的教師教育プログラムの運営に関する研究（2）：実習指導体制と実習生の意識に着目して（1．研究報告），教員養成カリキュラム開発研究センター研究年報，15：31-42.

岩田康之・金慇雅・早坂めぐみ・大和真希子・山口晶子（2021）教育実習の日本的構造：東アジア諸地域との比較から．学文社：東京.

徐広孝・中西健一郎・和田雅史・小澤治夫（2018）保健体育科教育実習生の実態調査：公立学校と私立学校の違い及び教育実習生の苦楽に与える要因の分析．スポーツと人間，2：61-67.

嘉数健悟・上地幸市（2017）教師の資質能力の形成を目指した大学と関係機関との連携のあり方について：A 市教育委員会の取り組み．沖縄大学人文学部紀要，19：119-124.

香川大学教育学部附属教育実践研究指導センター教育実習事前・事後指導研究プロジェクトチーム（1999）教育実習事前・事後指導のためのカリキュラム開発（7）：教育実習前における 3 年次生の「教育実習への意欲」を中心に．香川大学教育実践研究，31：61-73.

門屋貴久・後藤彰・依田充代・清宮孝文（2016）保健体育科教諭の職務における期待認知に関する

研究：A 地域中学校保健体育科教諭に着目して．日本体育大学紀要，45（2）：105-112.
勝亦紘一・深井一三（1984）保健体育科の教育実習に関する研究：中京大学体育学部を事例として中京大学体育学論叢，25（1・2）：89-104.
勝亦紘一・家田重晴・田川則子（1994）保健体育科の教育実習に関する研究-5-事前・事後指導に対する学生の評価と要望．中京大学体育学論叢，35（2）：59-73.
神山貴弥・栗原慎二・若元澄男・井上弥・鈴木由美子・林孝・山内規嗣・朝倉淳・伊藤圭子・植田敦三・木原成一郎・木村博一・中村和世・松本仁志・溝邊和成・山崎敬人・小林秀之・谷本忠明・若松昭（2006）臨床的指導力育成のための初等教育教員養成カリキュラムの開発に関する研究：広島大学における「特色ある教育実習プログラム」提案を受けて．学校教育実践学研究，12：31-39.
喜田裕子・小林正幸・早川惠子（2012）「マッピング付箋法」を用いた教師のためのカウンセリング研修事例．カウンセリング研究，45（2）：131-140.
木原成一郎（2000）イギリスの「学校を基礎にした教員養成」（a school-based initial teacher training）におけるメンターとしての学校教員の役割：小学校の体育授業を中心に．広島大学学校教育学部紀要 第一部，（22）：59-70.
木原俊行（2004）授業研究と教師の成長．日本文教出版：東京.
木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い．弘文堂：東京.
木下康仁（2007）ライブ講義 M-GTA：実践的質的研究法修正版グランデッド・セオリー・アプローチのすべて．弘文堂：東京.
児玉真樹子（2016）教育実習でのリアリティショックにおけるメンタリングのキャリア発達促進効果．キャリア教育研究，34（2）：31-40.
小松喬生（1990）教育実習カリキュラムにおける事前・事後指導の位置づけについて．教育実習研究指導センター研究紀要，14：1-4.
Kram，K．E．（1983）Phases of the mentor relationship．Academy of Management Journal，26：608-625.
Kram，K．E．（1985）Mentoring at work: Developmental relationships in organizational life．Glenview，IL：Scott，Foresman.
久保研二・木原成一郎・大後戸一樹（2008）小学校体育科授業における「省察」の変容についての一考察．体育学研究，53（1）：159-171.
黒﨑東洋郎（2006）主免実習前の 3 年次生の実践的指導力の基礎：「教育実習基礎研究」後の意識調査を中心に．岡山大学教育実践総合センター紀要，6（1）：131-139.
教育職員養成審議会（1987）教員の資質能力の向上方策について（答申）．文部省.
教育職員養成審議会（1997）新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第 1 次答申）．文

部省.
教育職員養成審議会（1999）養成と採用・研修との連携の円滑化について（第 3 次答申）．文部省.
前原武子・平田幹夫・小林稔（2007）教育実習に対する不安と期待，そして実習のストレスと満足感．琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要，14：211-224.
Marco，S．and Irena，Z．（2009）Teacher Education in Europe；Main Characteristics and Developments.，Anja Swennen・Marcel van der Klink（Eds.），Becoming a Teacher Educator：Theory and Practice for Teacher Educators．Springer：Netherlands，pp.11-17.
丸山範高（2005）授業リフレクションでの問題解決に関する一試論：国語科教育実習生の場合．中等教育研究紀要，（51）：1-8.
松田哲（2020）流通経済大学スポーツ健康科学部における教育実習に関する調査報告：2019 年教育実習振り返りアンケートから．流通経済大学スポーツ健康科学部紀要，13：43-55.
Matsko，K．K.，Ronfeldt，M.，Nolan，H．G.，Klugman，J.，Reininger，M．and Brockman，S．L.（2020）Cooperating Teacher as Model and Coach；What Leads to Student Teachers' Perceptions of Preparedness?．Journal of Teacher Education，71（1）：41-62.
三島知剛（2009）教育実習中の他者との関わりと教育実習生の授業・教師・子どもイメージ，授業観察力の変容．日本教育工学会論文誌，33（1）：71-81.
三島知剛・一柳智紀・坂本篤史（2021）教育実習を通した実習指導教員の学びと力量形成に関する探索的研究．日本教育工学会論文誌，44（4）：535-545.
三井勇・下村義夫・高橋岳（2018）スポーツ科学系大学における保健体育科教員養成の課題．山梨学院大学スポーツ科学研究，（1）：33-42.
三浦巧也・橋本創一・宮内卓也・櫻井眞治・小林正幸・池田一成・渡邉貴裕・尾高邦生・日下虎太朗（2019）教育実習の指導・評価観点に関する実態把握（3）：国立大学附属中学校を対象とした検討．東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要，（15）：65-72.
三浦朋子（2015）教育実習事前・事後指導のあり方に関する一考察：実習前後における学生の認識変化の分析を通じて．亜細亜大学課程教育研究紀要，3：1-14.
宮城信夫・石井勉（2010）教育実習生の実習前後の意識の差異に関する考察．琉球大学教育学部紀要，77：173-181.
三山緑（2010）教育実習生の「学習指導技量」形成に寄与する教育実習事前指導の構築（3）実習生の研究授業を評価する実習校指導教諭の視点に関する分析．東亜大学紀要，11：35-49.
宮崎達朗・鎌田正裕・新田英雄・前田優・狩野賢司・佐藤たまき・五十嵐敏文・羽仁克嘉・藤田留三丸・堀井孝彦・岡田仁・宮内卓也・浅羽宏・岩藤英司・川角博・小境久美子・小林雅之・坂井英夫・須藤俊文・田中義洋・宮城政昭・安西優也・加藤康孝・吉金佳能・宮崎達朗（2010）教育実習を基軸とした理科教員養成課程の学習方法・カリキュラムの研究 I：平成 21 年度東京学芸大

学附属学校研究会プロジェクト研究 II，東京学芸大学附属学校研究紀要，37：20-36.

宮田学（1982）〔I〕教育実習指導の効率化とシステム化：プロジェクト二年次の実践報告．名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要．（27）：3-12.

溝口繁美（2018）教育実習を単なる実習で終わらせないために：教育実習への授業評価導入の試み．神戸親和女子大学言語文化研究，12：85-98.

三好信浩（1969）アメリカとの比較においてみたわが国の教育実習の課題．茨城大学教育学部紀要，（18）：21-60.

メリアム：堀薫夫・久保真人・成島美弥訳（2004）質的調査法入門：教育における調査法とケース・スタディー．ミネルヴァ書房：京都．Merriam，S．B．（1998）Qualitative Research and Case Study Applications in Education（2nd ed.）Jossey-Bass：San Francisco.

村山功（2018）教員養成スタンダードから見た教育実習：静岡大学教育学部付属静岡中学校の場合．静岡大学教育実践総合センター紀要，28：335-341.

文部科学省（2017）教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令（平成 29 年文部科学省令第 41 号）.

長見真・阿部悟郎・小浜明（2010）日本における保健体育科教員養成カリキュラムに関する実態調査．仙台大学紀要，42（1）：13-30.

長岡知・渡邉貴裕・大久保菜穂子・中西唯公（2021）保健体育科教育実習における保健授業の実施状況と課題：体育系 A 大学の教育実習生と実習校によるアンケート調査より．順天堂スポーツ健康科学研究，11（1）：88-94.

中田正弘（2012）「授業研究」を通じた教育実習生の成長･発達の契機に関する考察．東北大学大学院教育学研究科研究年報，61（1）：63-82.

中田正弘・伏木久始・鞍馬裕美・坂田哲人（2014）教育実習生及び初任者・若手教員の指導を担当する教員に関する現状と課題．信州大学教育学部研究論集，（7）：31-46.

中村誠文・岡田明日香・藤田千鶴子（2012）「連携」と「協働」の概念に関する研究の概観：概念整理と心理臨床領域における今後の課題．鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要，7：3-13.

永田孝夫（2013）教育実習における授業実習の現状と改善：「教育実習記録」から実習生の授業実習を分析する．愛知大学教職課程研究年報，2：69-82.

西山久子・大竹晋吾・納富恵子（2015）ミドルリーダーシップを高めるメンタリング力向上の取組：異なる養成プロセスにおける実習の学校への貢献に着目して．日本教育大学協会研究年報，33：165-176.

西山久子・森保之・金子辰美・迫田裕子（2016）若年教員と中堅教員のメンタリング関係を促進させる取組：附属学校におけるカップリング実習の効果に関する質問紙調査．福岡教育大学大学院

教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）年報，（6）：203-210.
越智拓也・磯﨑哲夫（2016）理科教員養成における教育実習生の教師知識の発達に関する質的研究．学習システム研究，（3）：1-12.
岡野勉・宮薗衛・常木正則（2006）教育実践・臨床研究の研究方法の習得を目的とする教育実習カリキュラム（「研究教育実習」）の開発研究：4 年間の教育実習カリキュラムの構築を展望して．教科教育学研究，24：257-275.
小川宏・黒須充（1997）教員養成系大学・学部における保健体育科の改革状況について．福島大学教育実践研究紀要，（32）：63-69.
大林正史（2019）指導教諭の職務実態と研修ニーズに関する研究：A 県における指導教諭と校長に対する質問紙調査の分析を通して．鳴門教育大学学校教育研究紀要，（33）：111-119.
大森不二雄・高田英一・岡田有司（2017）教育の「質保証」を学生の「学習」に連結させるための課題：大学の内部質保証観と学生の学習観への合理的選択理論からのアプローチ（特集　大学教育と学習の革新）．東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要，（3）：75-88.
大野木裕明・宮川充司（1996）教育実習不安の構造と変化．教育心理学研究，44（4）：454-462.
大窄貴史・吉田博紀・家田重晴・勝亦紘一（2005）保健体育科教育実習における保健授業の担当時間及び担当分野について．中京大学体育学論叢，46（2）：99-113.
太田堅一朗（2018）これからの時代における高等学校の教員研修と若手教員支援：中堅教諭等資質向上研修とメンタリングに注目して．地域連携教育研究，2：69-81.
大津一義（1979）保健体育科教員の養成に関する調査研究-1-保健科教育実習の実態及び問題点．順天堂大学保健体育紀要，（22）：39-72.
大谷哲弘・山本奬（2015）教員のカウンセリング研修に求められる研修内容の検討：長期研修受講者と未受講者の比較から分かること．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，（14）：461-468.
織田長繁（1963）教育実習についての報告：新しい方式とその反省（III 特別研究）．名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要，（8）：104-110.
小柳和喜雄（2008）メンターティーチャー・ハンドブックの開発研究：媒介目標を用いた実習校担当教員と大学の指導教員の連携指導を目指して．教育実践総合センター研究紀要，（17）：177-183.
小柳和喜雄（2009）ミドルリーダーのメンターリング力育成プログラムの萌芽的研究．奈良教育大学 教職大学院研究紀要 学校教育実践研究，1：13-24.
小柳和喜雄（2010）実習指導における協力校と大学の連携に関する研究報告．奈良教育大学教職大学院研究紀要　学校教育実践研究，（2）：113-118.
小柳和喜雄（2011）メンターとメンティーの相互理解によってメンターリングの効果を向上させる

自己点検評価表の開発．教育実践総合センター研究紀要，（20）：19-28.

小柳和喜雄（2013）メンターを活用した若手支援の効果的な組織的取組の要素分析．教育実践開発研究センター研究紀要，（22）：157-161.

小澤熹・山﨑祥子・岩見禎二・崎野三太郎・吉田裕美子（2014）「学校教育体験実習I・II」に関する実践研究：教育実習の事前・事後体験教育の検討．東北女子大学・東北女子短期大学紀要，52：1-10.

Portner，H.（2008）Mentoring New Teachers（3rd ed.）．Corwin Press：Thousand Oaks California.

坂田成輝・音山若穂・古屋健（1999）教育実習生のストレスに関する一研究：教育実習ストレッサー尺度の開発．教育心理学研究，47（3）：335-345.

佐藤典子・佐久間邦友（2017）教育実習における評価票の検討：実習校からの評価と学生の自己評価の比較を踏まえて．郡山女子大学紀要，53：317-333.

佐藤裕（1996）教科教育学（保健体育科教育）への道程：私の歩んできた道．新体育社：東京，p.126.

柴山直・高橋桂子・鋤柄佐千子・五十嵐由利子（2003）受入校からみた教育実習の実態調査に関する報告．教育実践総合研究，（2）：63-74.

島田希（2014）初任教師へのメンタリングにおいてメンターが果たす機能と手法．高知大学教育実践研究，（28）：163-170.

下永田修二・菩提寺将・佐々木篤史・渡辺明日子・七澤朱音・西野明・杉山英人・小宮山伴与志・佐藤道雄（2017）中学校保健体育科教育実習における実習生の資質能力の変化：実習生の自己評価と実習指導教員の評価の比較．千葉体育学研究，（39）：1-11.

菅裕（2007）音楽科教育実習生の課題意識：音楽教師に求められる実践的知識の解明に向けて．宮崎大学教育文化学部紀要，16/17：1-10.

佐伯卓也（1985）学生教師の教育実習における授業認知能力と意思決定能力の変容．教育工学研究，（8）：45-54.

杉崎弘周・長岡知・物部博文・植田誠治（2018）教育実習生の保健授業の担当状況．日本体育学会大会予稿集，69：233.

杉田真衣（2018）教育実習事前事後指導の意義と課題．首都大学東京教職課程紀要，2：133-143.

須甲理生・四方田健二（2013）体育教師が有する教師観に関する一考察：運動部活動指導者としての教師観から授業者としての教師観へ．日本女子体育大学紀要，43：41-50.

高垣マユミ・吉村麻奈美（2015）教育実習前後の女子大生の認知と心理の変化：教員養成の質を高めるための現状分析と課題．津田塾大学紀要，47：53-71.

高橋哲郎・茨山良夫・野嶋榮一郎（1985）教育実習事前学習カリキュラムの 3 年間の試行に対する批判的検討．日本科学教育学会年会論文集，9：274-275.

滝沢洋平・針谷美智子・和田博史・松本健太・伊藤雅広・片桐正広・歌川好夫・白旗和也・近藤智靖（2018）東京都世田谷区並びに横浜市青葉区の中学校保健体育科の教師の意識に関する調査研究：保健体育科の授業，部活動，教育実習，生徒指導に着目して．日本体育大学紀要，48（1）：45-59.

竹内康裕・伊藤公介（2021）メンタリングを活用した若手教員の支援体制の有効性について：教員間の関係性を活かした生徒支援実践力の育成に焦点を当てて．静岡大学教育実践総合センター紀要，（31）：377-386.

達富洋二（2013）教育実習生の授業コミュニケーション力の傾向：実習経験者と実習未経験者の記述の比較．教職支援センター紀要，4：1-11.

歌川光一・鈴木翔（2016）教育実習と学校ボランティアの関連性をめぐる研究動向とその課題：教職志望学生の予期的社会化の観点から．秋田大学教養基礎教育研究年報（18）：73-81.

内田雄三（2015）教育実習における学生の成長：中学校保健体育科の授業実践を通して．白鴎大学教育学部論集，9（1）：179-199.

上森さくら・添田晴雄・滝沢潤・辻野けんま（2011）一般大学の教育実習が学生の自己評価に与える影響：大阪市立大学の教職課程における教育実習の位置づけの明確化にむけて．大阪市立大学大学教育，9（1）：1-13.

脇本健弘（2015）教師は経験からどのように学ぶのか．中原淳監修．教師の学びを科学する：データから見える若手の育成と熟達のモデル．北大路書房：京都.

脇本健弘・町支大祐（2015）教師の学びを科学する：データから見える若手の育成と熟成のモデル．北大路書房：京都.

山崎朱音・野津一浩・河合学・岡端隆・新保淳（2016）保健体育科におけるカリキュラム構成の将来的展望について（第 4 報）学習内容の連係を意図した「教科教育法」と「教科内容指導論」の取り組み．静岡大学教育実践総合センター紀要，（25）：279-287.

山崎清男（1982）「開放制」教員養成制度の意義と問題点（II）：教育実習に関する大学内制度を中心にして．研究紀要，20：15-28.

山本淳平（2016）学校教育におけるコーチングの特徴とその効果への一考察：教師の言葉がけに焦点を当てて．早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊，24（1）：1-12.

湯口雅史・西村公孝・佐藤公子（2013）教育実習における「社会的な学び」の可能性を見出す試論：「場」の萌芽と創発を結ぶ大学と実習校との連携への期待から．鳴門教育大学研究紀要 鳴門教育大学編，（28）：392-399.

横浜市教育委員会（2021）令和 3 年度 教育実習サポートガイド．
https://www.edu.city.yokohama.jp/tr/ky/k-center/daigakurenkei/R3-1-support-guide.pdf（最終閲覧日：2021 年 12 月 4 日）.

米沢崇（2007）我が国における教育実習施策の展開に関する一考察．教育学研究紀要，53（1）：376-381.

米沢崇（2008a）実習生の力量形成に関する一考察．日本教師教育学会年報，17（0）：94-104.

米沢崇（2008b）初任者からみた教育実習経験の意義に関する一考察．教育実践学研究，10（1）：11-20.

米沢崇（2008c）我が国における教育実習研究の課題と展望．広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部，57：51-58.

米沢崇（2010a）教育実習における実習校の組織風土と指導教員の指導・支援の検討．奈良教育大学紀要 人文・社会科学，59（1）：245-251.

米沢崇（2010b）実習校指導教員の役割と指導・支援に関する検討：A 大学附属の小学校の指導教員と教育実習生を対象とした質問紙調査の結果を中心にして．教育実践学研究，11（2）：11-20.

全国学校データ研究所編（2019）全国学校総覧．原書房：東京.